

岡田恵司

住宅事情や生活様式の変化に伴う近年の住環境の変化は、人の生活圏に棲息する生物にも影響を与え、その結果、従来さほど注目されなかったような生物が衛生上重要な位置を占めるに至る現象も観察されている。最近話題にのぼりがちなダニ問題においてもこの傾向は見られるようであるが、これらの現象を見るにつけ住環境の衛生管理が更に注目されるべき時期にきていると考えられる。そこで当研究所では、住環境、特に室内環境衛生を考える上で重要なポイントは何であるかを検討するため、今回は、特にダニに注目して、調査を行ったのでこれを報告する。

方法 調査は昭和60年8月に29の家庭を対象として、建築様式・築年数・床材・家族構成・掃除の状況等について行い、更に対象各家庭より室内塵を得た。分析項目は、水分含量・無機成分・目視による室内塵の組成・細菌真菌数・比色法による糖、タンパクの含量・ダニの種類別構成と数等について行った。

結果 室内塵1g当りのダニの平均数は1200頭。微生物については細菌で $10^5 \sim 10^6$ 、カビで $10^4 \sim 10^5$ 。水分含量は平均約6%。組成については綿ぼこり等繊維が70%近くを占めるものから1%程度のものであり、また $150\mu$ (100メッシュ)以下の微細塵も数%から60%近くのものまで千差万別であった。一方、糖は平均200ppm、タンパクは平均75ppm含まれていた。以上の実測データと調査の情報をもとに若干の考察を試みたところ微細塵及び水分含量が大きな要因となっていることがわかった。これは以前から耳にするところであるが、これらのデータをもとに生活様式との関連を今後調べて行きたい。